国立国語研究所学術情報リポジトリ

即時オープンアクセスが拓く学術研究の新世界：OAの理念，要件，実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2026-01-23 キーワード (Ja): オープンアクセス, オープンサイエンス, DOI, CCライセンス, 内閣府OA基本方針 キーワード (En): Open Access (OA), Open Science, Digital Object Identifier (DOI), Creative Commons License (CC License), Cabinet Office OA Basic Policy 作成者: 中西, 秀彦, 横山, 詔一 メールアドレス: 所属: 中西印刷株式会社, 国立国語研究所 名誉教授
URL	https://doi.org/10.15084/0002000597

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

即時オープンアクセス時代における研究者の言語生活

国立国語研究所名誉教授　横山詔一　**解説動画**：https://youtu.be/8hq14aDsqqQ

第11回「対話・共創の場」基調講演

テーマ：即時OA方針の推進に向けての課題共有

主催：ジャパンリンクセンター【DOI登録機関：国立国会図書館 (NDL)、科学技術振興機構 (JST)、 物質・材料研究機構 (NIMS)、 国立情報学研究所 (NII) による共同運営】https://japanlinkcenter.org/top/about/index.html

開催事務局：科学技術振興機構 情報基盤事業部

2025年1月27日（月）オンライン＋科学技術振興機構（JST）東京本部別館

本日のキーワードは「**永遠の目じるし**」です（DOIをはじめとする永続的識別子は永遠の目じるしの一つ）

1. 即時オープンアクセス（OA）時代の到来によって、研究者の生活はどのように変わるのでしょうか？本基調講演では、「永遠の目じるし」というキーワードを軸に、即時OA義務化の議論に「言語生活」という視点を加えます。そして、2025年度から研究者の「論文の読み書き」にどのような具体的な変化が生じるのかを予測します
2. さらに、即時OA義務化については「What（何を）」や「How（どのように）」という側面が頻繁に議論されますが、あまり触れられていない「Why（なぜ）」という根本的な問いにも焦点を当て、掘り下げて考察します

赤い太字：きわめて重要

赤字：「きわめて重要」と「重要」の中間あたり

黒い太字：重要

黄色いマーカ：きわめて重要であるが、横山の直観による意見

ここでは日本語で論文を投稿している研究者に着目する。その理由は？

- 即時OA（オープンアクセス）義務化施策の第一の目的は、特に先端科学分野において、国内研究者が海外の有力ジャーナルに発表した英語論文を、誰もが自由に閲覧・活用できるようにすることにあると思われる
- そこには**APC**（論文をOA出版する際に支払う論文掲載料：Article Processing Charge）を巡る深刻な問題があり、**転換契約**（Transformative Agreements）などの工夫がなされつつある
- また、先端科学分野では、**先取権（priority）**をめぐって熾烈な競争が繰り広げられている。先取権とは、論文の著者が世界の研究者に先駆けて当該の学術的知見を公表したことを権利として認め、論文のオリジナリティ（独自性）を保証する概念

➢ 上記は、先端科学からは距離がある分野（人文学など）の学協会に所属し、いつも日本語で論文を投稿している研究者にはあまり縁のない話、対岸の火事

➢ しかし、**即時OA義務化**の影響は、先取権やOA、OSに対する興味・関心が希薄で、いつも国内誌に**日本語で論文を投稿している研究者にも確実に波及する**

1592～1593年に印刷された天草版『平家物語』
天正遣欧使節が日本に持ち帰ったグーテンベルグ印刷機による
大英図書館所蔵 https://kotobaken.jp/release/news-190318-01/

実務を巡る目前の課題について

- 研究者の言語生活はアカデミック・ライティング（論文の読み書き）が中心。 **研究者のアカデミック・ライティング**に必要な要素の一つとして**即時OA実現活動**が2025年度から入ってくる
- 大学研究者の業務負担量はすでに限界に達しているため、即時OA実現活動をサポートする仕組みが必要になるのでは？
- 即時OA推進にかかる業務の全体像や輪郭はいつごろ見えてくるのか？
- 即時OA実現活動をサポートする仕組みのすべてを大学内で開発するのは困難では？
- アカデミック・ライティングと言えば、学生のためのセンターが大学図書館に併設されている場合もある。機関リポジトリも大学図書館が担当している場合が多い。**大学図書館**はこれから新たな役割・使命を期待される。その事実を社会に向けてさらに広く、分かりやすく広報する時機が到来したのでは？
- OA時代の**学協会の将来像**については武田（2011：https://doi.org/10.11517/jjsai.26.6_599）が参考になる

横山がオープンサイエンス（OS）やオープンアクセス（OA）に関心を持ったきっかけ

自己紹介

国立国語研究所『ことばの波止場』研究者紹介「受注生産方式の研究スタイルも悪くない」→「言語資源」という用語の誕生や「病院の言葉を分かりやすくする提案」などについて言及：https://kotobaken.jp/digest/05/d-05-06/

1. 博士号は実験心理学（心理統計も）で取得。1993年ごろから「日本人の読み書き能力は極めて高く世界トップクラスである。その根拠データはGHQの提案によって1948年に実施された調査結果の報告書（1951）に掲載されている」という先行研究の言説を一切疑うことなく非常勤先の大学授業で紹介。授業準備の際に自分の眼で報告書（1951）の内容を確認しなかった。2020年から大いに後悔し反省することに…
2. 上越教育大学で助手として6年間勤務した後、国立国語研究所に異動して33年間勤務し2024年3月末に定年退職
3. 現在は、青山学院大学非常勤講師。文学部日本文学科で「日本語教育特講I・II（2024年度のみ）」「日本語日本文学情報処理法I・II」を、教育人間科学部心理学科で「心理学特講B／認知心理学特講」を担当。ちなみに授業は新図書館（18号館マクレイ記念館）のPC教室で座学プラス実習を実施（SPSSやRなどを使用）。青学大には22年連続出講
4. 東京大学大学院客員教授（2015年4月～2017年3月、2022年4月～2024年3月）として言語情報科学専攻で「言語変化のデータサイエンス基礎」や「言語の認知・記憶・習得に関する計量的研究法」の講義を担当（関連する公式動画：https://www.youtube.com/watch?v=qKmOS7RhS6c）
5. 言語生活の研究に従事
   - 異体字の好みの研究、たとえば「会ー會」「桧ー檜」「観ー觀」「潅ー灌」「壷ー壺」などについてどちらを使いたいか直観的に選択してください、などの調査を実施してデータを分析（関連する公式動画：https://www.youtube.com/watch?app=desktop&v=AfJk2T6IKn4）
   - 愛知県岡崎市における身内敬語意識の変化予測研究で社会言語科学会から2009年度徳川賞（優秀論文賞）を受賞（関連する公式動画： https://www.youtube.com/watch?v=7nNAiaIFaso）
   - 読み書き能力調査にも関心がある

1945年8月30日14時05分、厚木海軍飛行場に到着したマッカーサー氏。これから横浜市のホテルニューグランドに向かう

横山がオープンアクセスやオープンサイエンスに関心を持ったきっかけ

1. 日本の成人男女を対象にした全国規模の読み書き能力調査は、これまで一例あるのみで、第2次世界大戦後の米国の占領政策のもと1948年に実施された（国際学力調査PISAは15歳のみ）
2. その調査の**報告書（1951）**は「日本人の読み書き能力は極めて高く世界トップクラス」という「常識」の**科学的根拠**とされてきたが、その「常識」は再検討の余地がある
3. 上記の再検討には、報告書（1951）ならびにその関連史料を世界中の研究者がいつでも簡単に閲覧できるような環境整備が必要である。すなわち、オープンサイエンスの推進が重要

- 第18回NINJALフォーラム（2023）講演スライド「日本人の読み書き能力1948年調査のナゾver.8.1」https://researchmap.jp/YOKOYAMA_Shoichi/presentations/44277347/attachment_file.pdf
- 上記講演の公式動画：https://www.youtube.com/watch?v=1On4JNToeQM

GHQ占領期の略年表（日本：黒字、海外：青字）

	政治・経済・社会	教育・言語政策
1945年	8月、第二次世界大戦終わる。マッカーサー来日。GHQの日本占領開始、民主化・非軍事化を推進	
1946年	1月、天皇「人間宣言」。3月、チャーチル「鉄のカーテン」演説、冷戦の始まり。4月、戦後初の総選挙（婦人参政権の実現）。11月、日本国憲法公布	3月、『第1次米国教育使節団報告書』でローマ字採用を勧告。4月、報告書に対するマッカーサーの声明が米国で新聞報道。11月、「当用漢字表」「現代かなづかい」内閣訓令・告示
1947年	5月、日本国憲法施行。12月、改正民法公布（家制度廃止）。内務省解体	2月、文部省「ローマ字教育実施要項」公表。3月、教育基本法、学校教育法公布
1948年	8月、大韓民国成立。9月、朝鮮民主主義人民共和国成立。11月、極東軍事裁判。対日占領政策の経済復興重視への転換	2月、「当用漢字音訓表」。**8～10月、読み書き能力調査実施**。10月、文部省教科書『民主主義上』。12月、国立国語研究所創立
1949年	4月、NATO成立。10月、中華人民共和国成立。11月、湯川秀樹にノーベル物理学賞	4月、「当用漢字字体表」。8月、『民主主義下』刊行
1950年	2月、米マッカーシー旋風の始まり。6月、朝鮮戦争勃発。７月から年末、企業のレッドパージ	9月、第2次アメリカ教育使節団、ローマ字教育の改善勧告
1951年	4月、マッカーサー解任。9月、サンフランシスコ講和条約調印。日米安全保障条約調印	**4月、『日本人の読み書き能力』刊行**
1952年	4月、連合国の日本占領（事実上、米国の単独占領）の終結。GHQの廃止。日本の主権回復	

日本人の読み書き能力1948年調査の報告書（1951）について

- 1951年4月に初版、再版は同年7月
- 東京大学出版部（現在の東京大学出版会）から出版
- 900ページを超えると言われているが、今回点検したところ実際は750ページに達しないことがわかった
- 販売価格は1,800円

国家公務員初任給平均は1950年4,223円、2020年は185,200円、これをもとに1950年の1,800円を2020年の価値に変換すると約79,000円

報告書（1951）の結論として「提案」が示されている。その冒頭部を示す（報告書429頁）。
これまでの「常識」とは正反対のことが明記されている

https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/yomikaki/011/PDF/ymkk-011.pdf

§92　提　案

日本では，義務教育がよく普及し，就学率も極めて高く，国民教育のために払った努力も従來極めて大きなものであった．このために，まったく字の読み書きができないという者は極めて少ないのであるが，それにもかかわらず，「正常な社会生活を営むのにどうしても必要な文字言語を理解する能力」は決して高いとはいえない．literacy を持つといえる者は 6.2 %にすぎない．

報告書（1951）の結論を、時代背景などを踏まえて正確に読み解くためにGHQ文書の調査研究も実施

「日本人の読み書き能力は極めて高く世界トップクラス」という「常識」の根拠となる記述はどこにも見当たらないことを確認

GHQが作成した調査企画書「**Literacy Research Program**」

- 国立国会図書館憲政資料室にマイクロフィッシュが保管されている
- 国立国語研究所に紙の現物が存在し、デジタル画像がOA化されている
- 右は国語研による画像（CC BY）

https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=literacyrpen

LITERACY RESEARCH PROGRAM

I. GENERAL:

A. World Situation on Literacy:

World statistics on reading and writing abilities have not been based upon any common definition of literacy, nor do they reflect any standardized techniques for its measurement. In consequence, there is often doubt as to what such statistics mean in terms of the ability to read and write, and the situations reflected by two test series are seldom comparable.

UNESCO has now embarked upon a program of fundamental education, a major feature of which is the development of minimum literacy in areas of low educational level. No announcement has yet been made of the standards or techniques that will be used for this project.

The conclusion is that, with one exception to be noted later, previous work on literacy outside of Japan offers little assistance in constructing a research program for this country.

B. Previous Japanese Research:

Official Japanese figures on literacy were based upon the examination of conscripts or were assumptions from the amount of education received. This work is not representative of the population, nor, for reasons to be discussed later, is it readily defensible as a measure of literacy. In addition, several other tests have been made of reading and writing abilities and are used in discussions of language reform. These tests, however, have been so limited in scope and open to differing interpretations that they are not adequate support for any large-scale programs connected with either language reform or the combatting of illiteracy.

C. Research on Reading and Writing Ability and Literacy:

In the last generation, a body of techniques for research into reading and writing abilities has been developed, especially in America. This study has grown up primarily in order to assess and guide language education rather than to determine and combat illiteracy.

In recent years, literacy has come to be given a new type of definition in terms of function, i.e., of the uses made of reading and writing. In the U. S. Census of 1940, a measurement of functional literacy was made in terms of the amount of education received. Anyone finishing the fifth grade was considered, by that fact, to be literate.

With the outbreak of war, the U. S. Army embarked upon a large-scale literacy training program and required some means of defining and demonstrating literacy. It adopted the functional definition and the educational standard for its measurement while, for doubtful cases, it devised tests utilizing principles previously developed by educational research for testing reading and writing abilities.

II. DEFINITION OF LITERACY:

The ability to raed and write in a population like the Japanese can be expected to vary within a wide range. It is hardly adequate, therefore, to define being literate as being "able to read and write". Literacy in-plies a degree and type of ability that can be compared and contrasted with other reading and writing abilities. Literacy can be considered a minimum, designated as such by the testor, among many possible abilities, and is thus a threshold of acceptable capacity.

The problem is—in terms of what criteria is the testor to determine that certain abilities indicate literacy, literacy, while others, Whether above or below it or of a different type, do not do so acceptably' The concept of literacy implies an evaluation of different reading capacities in terms of some factor(s) other than those descriptive of the abilities within a population do not give information in terms of which this evaluation can be made.

(1)

研究資料やデータのオープンアクセス化

- 国立国語研究所は、情報・システム研究機構の統計数理研究所やデータサイエンス共同利用基盤施設 社会データ構造化センターと協力しながら報告書（1951）の画像や関連資料のOA化を推進
- GHQ作成の**調査企画書（英文）「Literacy Research Program**」と、その**和訳文書**が国立国語研究所に保管されている。デジタル画像もネット公開されている

https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=literacyrpen
https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=literacyrpjp

参考文献：高田智和ほか（2021）「1948年読み書き能力調査の企画書「Literacy Research Program」について」『日本語学会2021年度秋季大会予稿集』31-36

参考資料：日本人の読み書き能力調査に関する最近の研究成果

■ 読み書き能力調査委員会 編（1951）**『日本人の読み書き能力』**、東京大学出版部、国立国語研究所「日本語史研究資料」にて画像公開 https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=yomikaki

【政治学の観点から**】**

賀茂道子（2024）「日本民主化における言語改革の背景と意義」『国立国語研究所論集』26, 151-169. https://doi.org/10.15084/0002000159

【テスト理論の観点から**】**

横山詔一・相澤正夫・久野雅樹・高田智和・前田忠彦（2022）「『日本人の読み書き能力』（1951）における非識字率の再検討 ― テストとしての問題点を中心に ―」『基礎教育保障学研究』6, 11-28. https://doi.org/10.32281/jasbel.6.0_11

【社会言語学の観点から**】**

横山詔一・前田忠彦・高田智和・相澤正夫・野山広・福永由佳・朝日祥之・久野雅樹 (2021)「日本人の読み書き能力1948年調査における非識字率と生年の関係」『計量国語学』33(8): 602–611. https://doi.org/10.24701/mathling.33.8_602

➢ 国立国語研究所「ことば研究館」ことばの疑問「日本人の識字率が高いって本当ですか」https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-226/

即時オープンアクセスの実現に向けた動き

即時オープンアクセスの実現に向けた動き

2024年8月27日と28日に開催された「「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」の実施にあたっての具体的方策」に関する内閣府説明会とそれに基づく2024年10月8日改正文書の要点を以下に示す

（内閣府 2024c）https://www8.cao.go.jp/cstp/hosaku_setsumei.pdf

（2024年10月8日改正）https://www8.cao.go.jp/cstp/openscience/r6_0221/hosaku.pdf

1. オープンアクセス（OA）は「原則」として研究者の所属機関のリポジトリ上で行うこと
2. 所属機関のリポジトリが未整備の場合は、 NII Research Data Cloud（NII RDC）上で学術論文及び根拠データを検索可能な分野別リポジトリや、国立研究開発法人科学技術振興機構（Japan Science and Technology Agency：JST）が運用するプレプリントの公開プラットフォームであるJxiv（ジェイカイブと読む）等のリポジトリを使用可能であること
3. リポジトリ公開までの期間は論文刊行から3か月程度が望ましいこと
4. 義務化とは、研究者が即時OAに向けて「**最大限努める**」ことであり、出版社や雑誌側が即時OAを認めていない等、何らかの事情でそれが困難な場合にはその理由を報告し、当該事情が解消され次第、OA化すること

今回の即時OA義務化は、職業研究者が**公的資金を得て行った研究成果**のうち、「査読付き学術論文（電子ジャーナルに掲載された査読済みの研究論文（著者最終稿を含む））及び根拠データ（掲載電子ジャーナルの執筆要領、出版規程等において、透明性や再現性確保の観点から必要とされ、公表が求められる研究データ）」のみを対象にする

図は「日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて」横山詔一・石川慎一郎・井田浩之・相澤正夫（2024）Jxivプレプリント（ver.4）DOI: https://doi.org/10.51094/jxiv.720から引用

なお、今般、義務化されたOAは、OS（オープンサイエンス）実現のための重要な手段であり、サイエンスの営みの一部をなすものでもある

図は「日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて」横山詔一・石川慎一郎・井田浩之・相澤正夫（2024）Jxivプレプリント（ver.4）DOI: https://doi.org/10.51094/jxiv.720から引用

即時OA義務化に対する研究者の意識は？

即時OA義務化に対する研究者の意識は？

https://www.editage.jp/blog/details-of-attitude-survey-on-immediate-oa-obligation/

エディテージ（カクタス・コミュニケーションズ株式会社）による

即時OA義務化の基本方針について、知っていましたか？　(n=1012)

職階別

所属機関別

- 知らなかった人が大半を占めた。
- 特に医師・医療従事者に情報が届いていない。

即時OA義務化に対する研究者の意識は？

https://www.editage.jp/blog/details-of-attitude-survey-on-immediate-oa-obligation/

調査名：OA義務化に対する研究者意識調査

調査期間：2024年8月27日～9月6日

調査主体と調査対象：調査主体はカクタス・コミュニケーションズ株式会社。調査対象はエディテージ（カクタス・コミュニケーションズ株式会社）の利用者を中心とした、論文出版経験がある研究者

回答数：1,012名

方法：オンラインアンケートフォーム自主回答形式

エディテージ（カクタス・コミュニケーションズ株式会社）による結果説明の要点

1. 即時OA義務化の方針を研究者の71%が知らない。研究者はOA化に関心が強く、研究を社会に還元する理念には賛同する声が多い一方で、方針を支持する人は35％、積極的にOA化を推進したいと考えている人も51％に留まる
2. また、今回の即時OA義務化方針では、論文の著者最終稿を機関リポジトリに公開するグリーンOAが推奨されているものの、所属する大学等に**機関リポジトリ**が「ない」と答えた人が30％、「わからない」と答えた人が28％で、合計すると全体の58%と高い。方針の実施に向けて、研究者への情報発信と理解の拡大、負担軽減に向けた支援が重要

この講演のキーワードは「永遠の目じるし」

この講演のキーワードは「永遠の目じるし」

1. 即時OA義務化に関する議論に「言語生活」という観点を導入し、即時OA義務化が研究者の言語生活のうち特に「論文の読み書き：アカデミック・ライティング」にどのような変化をもたらすのか具体的に予測してみる
2. また、即時OA義務化についてWhatとHowに関する議論はよく見聞きするが、Whyについてはあまり検討がなされていない気がするので、Whyについて少し掘り下げて考えてみる

- 即時OAの実現に向けては、さまざまな課題がある。以下の拙論（プレプリント）では、なるべく多くの課題に言及することを共著者一同で意識した

  「**日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて**」横山詔一・石川慎一郎・井田浩之・相澤正夫、『国立国語研究所論集』に投稿、査読で採用決定、印刷中（2025年7月公刊予定）、Jxivプレプリント（ver.4）DOI: https://doi.org/10.51094/jxiv.720

- きょうは、時間の制約もあるため、拙論（プレプリント）で検討したさまざまな課題のうち、上記の2つ（言語生活という観点、Whyについて）を取り上げる
- 国内の学会、出版社、大学図書館、研究機関などの関係者にも、今後の業務の進め方を検討する際に参考になる部分があるかもしれない

今回の要点

オープンアクセス（オープンサイエンス）に欠かせない大切なもの、それは、2つの「**永遠の目じるし**」と1つの「**永遠の旗じるし**」。これらはOAにおける三種の神器のようなもの。三位一体で機能する

イデア論：市民に伝わる理念を（「FAIR原則」は難解用語）

永遠の旗じるし
SDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」

技術論：作業効率の改善を

社会論：権利意識の断捨離を

永遠の目じるし（その1）
DOI：Digital Object Identifier

永遠の目じるし（その2）
CCライセンス

この先の進め方

「日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて」の第6節と第1節を中心に説明する。節の順番が前後しているが、気にしないで欲しい

I. 夢でよかった「拙論第6節　論文執筆活動の状況予測（フィクション）」

II. なぜOAなのか「拙論第1節　問題の背景」

I. 夢でよかった「拙論第6節　論文執筆活動の状況予測（フィクション）」

1592～1593年に印刷された天草版『平家物語』
ポルトガル語式のローマ字で書かれているため、
当時の日本語の発音を知る手がかりとなる
大英図書館所蔵
https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/

NIFON NO
COTOBA TO
Historia uo narai xiran to
FOSSVRV FITO NO TAME-
NI XEVA NI YAVA RAGVETA-
RV FEIQE NO MONOGATARI.

IESVS NO COMPANHIA NO
Collegio Amacusa ni voite Superiores no go men-
qio to xite core uo fan ni qizamu mono nari.
Go xuxxe yon M. D. L. XXXXII.

- ここでは、2025年以降の論文執筆活動の状況を具体的に予想した仮想事例（フィクション）を示し、日本語学術論文の即時OAを研究者の手で実現するための検討ノートとする
- これらは、研究者が2025年に直面する可能性のあるシナリオのうち、あまり不自然ではなく、稀少でもないと予想される1つのケースである
- ストーリーは研究者のY氏がみた夢であり、Y氏の視点から描かれているが、途中で別の立場によるコメント（仮想例）も入っていることがある
- そのため、いささか文学的な表現も散見されるかもしれないが、この先の状況を具体的にイメージするのに効果を発揮する参考資料の1つにはなるであろう

用語集

1. **CCライセンス**：クリエイティブ・コモンズ（CC）・ライセンスとは，著作者が著作物のライセンス（利用許可条件）に関して意思表明を行うことで，情報流通を円滑にするという目的がある。対象となるのは幅広い著作物であるが，ここでは論文に範囲を絞る。ライセンス（利用許可条件）に関する意思表明の方法は6種類。論文利用の制約条件がもっとも緩いのが「CC BY（表示）」である。これは論文の著者氏名，表題，掲載誌の書誌情報等（以下，著者クレジットという）を表示すれば，改変や営利目的利用が可能である。逆に論文利用の制約条件がもっとも厳しいのが「CC-BY-NC-ND（表示，非営利，改変禁止）」で，改変もできなければ営利目的の利用もできない
2. **プレプリント**：一般に，プレプリントと言う場合，査読前ないし査読中の原稿を指す。プレプリントサーバーはそれを公開するシステムである。英語論文に関しては海外で多くのプレプリントサーバーが稼働し，科学研究の進歩に大いに貢献している。日本では，英語論文・日本語論文ともに投稿可能なプレプリントサーバーとして， JSTが運用するJxivがある
3. **エンバーゴ**：原語の“embargo”は，本来，「禁輸」や「商船の出入港禁止」を意味する語であるが，そこから派生して「報道や公開を一定期間差し止める」という意味でも使われる。本稿のように研究成果のOA化という文脈で「エンバーゴ」と言う場合は，論文が紙版で（あるいは限定メンバーのみに対してウェブ上に）公開されてからウェブ上で一般公開されるまでの期間を指す。国内の学会について言うと，論文はまず印刷版ジャーナルで会員に公開した後，所定期間（1年が多い）経過後，J-STAGE等で一般公開する仕組みを持つところが多い。この場合であれば，印刷版公開からJ-STAGE公開までの1年間がエンバーゴとなる。逆に，こうした期間を置かず，印刷版公開と同時にウェブでも一般公開する場合は「ゼロエンバーゴ」と称する

CCライセンス

オープンアクセス（オープンサイエンス）に欠かせない大切なもの、それは、2つの「**永遠の目じるし**」と1つの「**永遠の旗じるし**」。これらはOAにおける三種の神器のようなもの。三位一体で機能する

シーン１【科研費申請の準備を始める】

1. ある日、私は科研費申請にかかるWebシステムにアクセスしたところ、それまではなかった「誓約書」の提出を求められていることに気がついた
2. その誓約書には「私ならびに私の共同研究者は、オープンサイエンス（OS）とOAの理念を遵守し、科研費による成果物として論文を公開する際に、同時に無料で公開することを誓います。この誓約に違反した場合は研究費の支給を停止されることを自覚しています」と記されているではないか
3. 私は「研究費の支給を停止」という文言が気になり、ネット検索等で調べてみたところ、数年前から大学図書館関係者等から「2025年学術論文即時OA義務化」として情報提供がなされていることを初めて知った
4. あわてて自分の所属している学会のジャーナルが即時無料アクセスの条件に適合しているかを確認してみたところ、ほとんどが条件を満たしていないことに気がついた
5. 私は共同研究者（科研費の研究分担者）と共著論文を投稿する計画を立てていたので、共同研究者にも相談してみたが十分な情報を得ることができなかった

シーン１：別の観点からのコメント

- 誓約書を求められたり、ペナルティが課せられたり等、そこまで踏み込んだ施策になるか決まっていない現在の段階で、研究者の不安を煽るような言説を示すのは適切ではないと思う
- 海外の状況、特に英国のウェルカム財団の動向を見ると、いずれはペナルティが科せられるのではないか。そうしないと不公平が生じる

シーン２【誓約書を出してよいか悩む】

1. このままでは、研究費の支給を停止されるリスクがあるかもしれないと不安に思った私は、すぐに自分の所属学会に問い合わせてみた。その結果、いくつかの学会から「即時無料公開は技術的にいつでも対応できますので大丈夫です。ご安心ください」との回答を得て、やれやれと胸をなで下ろした

2. また、大学の同僚の教員や科研費担当の事務窓口にも相談してみたところ「たとえば大学紀要に論文を書いた場合は、機関リポジトリから無料公開できるので大丈夫ではないか」という回答を得た。ただし、機関リポジトリを担当している大学図書館の担当部署に確認することはしなかった。実は、これが後に影響を及ぼすことになる

3. さらに、知合いの研究者から「研究者SNSで有名なRGを利用すれば、論文にDOIを付けることが簡単にできるし、プレプリント等もすぐに公開できるよ」と聞いて、ならばますます安心だと思った

4. これで問題は解決したと確信した私は、誓約書を提出し、科研費申請を無事に完了することができた

シーン２：別の観点からのコメント

- 即時無料公開を2026年に実現するには、単に技術的にいつでも対応できるだけでなく、OAを実現したと認定される要件を十分に確認し、その対応策を学会内で検討する必要が生じるであろう
- OAを実現したと認定される要件の1つに「研究データ基盤システム（NII Research Data Cloud）で安定して検索可能なこと」があると知人の研究者から聞いた
- そこで気になったのはCCライセンスのことである。日本語で出版される査読付き学術論文の大部分はCCライセンスが付されていない。このままだと、利用者が当該論文を利用する際に権利関係について迷いが生じ困惑するおそれがある
- 大学図書館が運用管理している機関リポジトリの担当者に相談しなかったというのは、大きなミスではないか。研究データ基盤システム（NII Research Data Cloud）と機関リポジトリが連携してOAを実現するとも聞いているので、まずは機関リポジトリの担当者に相談すべきである

シーン３【科研費を獲得し、早めに論文を投稿しようとする】

1. 2026年の2月頃に科研費が獲得できたとの知らせを受け、私は研究成果をなるべく早めに多くだそうと張り切っていた。そんなある日、すこし気になる情報が入ってきた

2. 1つ目は、論文の公開にあたっては、CCライセンスの表示が必要になるらしいという点である。ここで私は頭を抱えた。まず、CCライセンスという用語はこれまで見聞きしたことがなく、用語の意味が理解できない。そこで、知り合いに相談したのであるが、曖昧な情報しか得られなかったので、**共著者に相談してなんとなく「CC-BY-NC-ND」つまり「表示、非営利、改変禁止」を選択**することにした。これが後に禍根を残すことになる

3. 2つ目は、学内紀要に書いた論文を公刊と同時に機関リポジトリから公開することは無理らしいという点である。大学図書館に直接確認してみたところ、「大学図書館としても所属教員の研究成果の公開には積極的に取り組んでいるところですが、今回の制度改変で多数の教員から即時公開の依頼が殺到した場合、現在の体制では処理に一定の時間を要し、厳密な意味での「即時」とならず、しばらくお時間をいただくケースがあるかもしれません」ということであった

4. そこで、私はなにか打開策はないか尋ねた。その機関リポジトリ担当者は「研究者自身が論文を即時公開できるシステムにご自分の手で論文PDFを公開なさるのがよいかもしれません。たとえば、プレプリントサーバー等の活用も可能でしょう」と答えた

シーン３：別の観点からのコメント

- 大学図書館の機関リポジトリ担当者にインタビューして取材すべきではないのか
- 研究者自身が論文を即時無料公開できるシステムはどこにあるのか。大学の機関リポジトリごとに、そのようなシステムが2026年までに準備できるのか

シーン４【エンバーゴに対抗する策として権利保持戦略を考える】

1. 私は大学図書館の機関リポジトリ担当者との相談を終えて、自分の研究室に戻る途中で、たまたま知合いの心理学者とすれ違った。その瞬間、心理学の世界では実験結果の再現性の問題を巡ってOAやOSについていろいろと議論がなされているらしいことをどこかで読んだことを思い出した

2. そこで、思い切って、その心理学者に「ちょっと突然で恐縮ですが、たいへん困っていることがありまして、ご教示を賜りたく存じます。いま10分間ほどお時間をいただけますか？私の研究室はすぐそこですから、お越しいただけますか」と相談をしてみた。その相談の結果、「権利保持戦略」というやり方があることを知った

シーン４：別の観点からのコメント

- 国内の学会ジャーナルは日本語で出版されるものが大多数である。2024年5月現在では、多くにエンバーゴが課せられている
- エンバーゴを2025年のうちに全廃すれば、問題の大部分は解決するのではないか
- エンバーゴを全廃すると、学会の会員数や学会ジャーナルの機関購読者（大学図書館等）の数が減少し、**学会の財務状況が急激に悪化**して学会運営が成り立たなくなるので、絶対に反対である

シーン５【著者間でのクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの共通理解不足に起因する問題が発生】

1. 私は、論文の即時無料公開を実現することができた。その研究成果について、一般向けの講演会等で、専門家ではない人たちに分かりやすく説明することを心がけた
2. そうして3ヶ月ほど経過したある日、大学の研究倫理審査委員会から、私に対して**研究不正の申し立てがあった**ので調査を開始するとの連絡が届いた。「何かの間違いじゃないのか」と思いつつ、連絡の文面を詳しく読んでみて仰天した
3. 今回の論文は単著ではなく共著論文（筆頭著者は私）である。その共著者一同から以下の訴えがあったのだ
4. 「CC表示の際に非営利、改変不可を選択しました。即時無料公開した論文には、そのことが明示されています。ところが、Y氏は共同研究者の許諾を得ることなく、一般向けにわかりやすくという（自分勝手な）理屈で論文の内容を（私どもの受け止めでは）不正確な形で世間に伝えています。これは看過できない改変にあたると共著者一同は考えます。また、Y氏は企業等の営利組織が主催する文化講演会等で、共同研究者の許諾を得ることなく、研究成果の講演を単独で行い、講演料を得ています。これは非営利に違反する行為だと共著者一同は認識しています。このような行為は明確な研究不正に該当すると私どもは考えますので、貴大学で調査の上、しかるべき処置をよろしくお願い申し上げます」

シーン５：別の観点からのコメント

- このような話は単なる空想でしかなく、無視してよいと考える
- 今後は、これに類するケースも出てくるのではないか
- CCライセンスについては共著者と慎重に相談し、できれば共著者全員で同意書を残すのが安全であろうと考える。そのような同意書の書式はどこかにあるのか
- **同意書の書式の実例**は、以下のプレプリントの末尾に示されている

https://jxiv.jst.go.jp/index.php/jxiv/preprint/view/73

https://jxiv.jst.go.jp/index.php/jxiv/preprint/view/161

https://jxiv.jst.go.jp/index.php/jxiv/preprint/view/418

I. 夢でよかった「拙論第6節　論文執筆活動の状況予測（フィクション）」のまとめ

この講演のキーワード「永遠の目じるし」について

- CCライセンス表示は一度決めたら永久に変更できない。永遠の目じるし
- どの表示を選択するか、きわめて重要な問題であることを研究者に周知すべき
- さらに、原則として「CC BY」とするのがよいのではないかと横山は考える

II. なぜOAなのか（Whyを掘り下げる）「拙論第1節　問題の背景」

NIFON NO
COTOBA TO
Historia uo narai xiran to
FOSSVRV FITO NO TAME-
NI XEVA NI YAVA RAGVETA-
RV FEIQENO MONOGATARI.

IESVS NO COMPANHIA NO
Collegio Amacusa ni voite Superiores no go men-
qio to xite core uo fan ni qizamu mono nari.
Go xuxxe yon M. D. L. XXXXII.

1592～1593年に印刷された天草版『平家物語』
現存する最古の日本語学習読本でもある
大英図書館所蔵 https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/

市民も読者

オープンアクセス（オープンサイエンス）に欠かせない大切なもの、それは、2つの「**永遠の目じるし**」と1つの「**永遠の旗じるし**」。これらはOAにおける三種の神器のようなもの。三位一体で機能する

オープンアクセスと日本語学術論文

Nature誌に掲載された記事（Singh Chawla, 2022）の抜粋を以下に紹介する

1. 日本の研究論文生産量は世界でもトップクラス
2. しかし、日本の研究者が論文の初期版を**プレプリントサーバー**で共有することはあまりない
3. 科学技術振興機構（JST）情報基盤事業部の久保田壮一氏によれば、JSTはこの状況を変えたいと考えている
4. 日本語の論文も投稿できるプレプリントサーバーJxivを立ち上げたのは、既存（海外）のプラットフォームの欠落を埋めるため。日本語で発表される論文の多くは、歴史、経営、言語学、学際科学などの分野のものである。既存のプラットフォームは、日本における上記分野の研究成果を十分にカバーできていない

ここでは日本語で論文を投稿している研究者に着目する。その理由は？【再掲】

- 即時OA（オープンアクセス）義務化施策の第一の目的は、特に先端科学分野において、国内研究者が海外の有力ジャーナルに発表した英語論文を、誰もが自由に閲覧・活用できるようにすることにあると思われる
- そこには**APC**（論文をOA出版する際に支払う論文掲載料：Article Processing Charge）を巡る深刻な問題があり、**転換契約**（Transformative Agreements）などの工夫がなされつつある
- また、先端科学分野では、**先取権（priority）**をめぐって熾烈な競争が繰り広げられている。先取権とは、論文の著者が世界の研究者に先駆けて当該の学術的知見を公表したことを権利として認め、論文のオリジナリティ（独自性）を保証する概念

➢ 上記は、先端科学からは距離がある分野（人文学など）の学協会に所属し、いつも日本語で論文を投稿している研究者にはあまり縁のない話、対岸の火事

➢ しかし、**即時OA義務化**の影響は、先取権やOA、OSに対する興味・関心が希薄で、いつも国内誌に**日本語で論文を投稿している研究者にも確実に波及する**

基礎科学分野の日本語学術論文もまたOA化と深くかかわりを持つと考える理由

1点目は、日本語学術論文が日本の基礎研究の充実と深化に大きな貢献を果たしていることである

1. 有田（2021:146）は、OA、さらにはそれによって実現されるOSが「**母語を抜きには語れない**」とした上で、「基礎研究の世界で日本が存在感を示してこられたのは、日本独自の研究哲学があったからだ。英語力ではない。その伝統を生かす施策が今必要とされている」と強調している
2. 最先端の科学研究の成果をまとめ、国際的に発信した英語論文はもちろん重要であるが、研究者が自身の母語で深く思索した成果としての日本語学術論文もまた、OAによって広く読まれる必要がある

基礎科学分野の日本語学術論文もまたOA化と深くかかわりを持つと考える理由

2点目は、日本語学術論文が、研究の裾野を広げ、科学への一般市民の参画、すなわち、市民科学を促進する可能性を持つためである

1. 一例として、JSTが運営する電子ジャーナルのプラットフォームである科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）上でよく読まれている論文を見てみよう
2. 2024年3月の月間アクセス数ランキングの第5位は、「国立科学博物館所蔵ヤマイヌ剥製標本はニホンオオカミCanis lupus hodophilaxか？」という日本語学術論文であるが（小森・小林・川田 2024）、**筆頭著者**の小森日菜子氏は、論文執筆当時、墨田区立小梅小学校に通学する**小学生だった**
3. 学術論文には、「書くこと」（writing）と「読むこと」（reading）の両面が存在するが、幅広い日本語学術論文のOAが実現し、多くの論文がオンラインで読めるようになれば、小学生であっても学術論文を読んでみたいと感じる機会が拡大するだろう
4. 小森氏らの論文は、市民が学術的・専門的科学に参画したものであると同時に、幅広い市民を広く科学研究に誘うという点で、市民科学の好例である

基礎科学分野の日本語学術論文もまたOA化と深くかかわりを持つと考える理由

3点目は、学術大会等において以下のようなシンポジウムなどの開催が急増すると予想されるからである

- **研究・イノベーション学会**第39回年次学術大会 企画セッション（2024年10月30日）
「『日本語学術論文』即時オープンアクセス義務化を巡る論点」

https://www.jsrpim-daigakukeiei.jp/post/2024-10-30

上記講演資料

https://www.jsrpim-daigakukeiei.jp/post/20241105

上記学術大会の企画セッションにおけるTaylor ＆Francis Group 山之城チルドレス智子氏による講演「オープンサイエンス時代のオープンアクセス基礎知識」スライド1枚目、副題として「日本語論文OA出版にフォーカス」とある

SDGs（持続可能な開発目標）との関連について

- そもそも市民科学は、世界が直面する課題に取り組む科学研究に広く一般の人々が参画することを前提としており、科学の民主化の1つのあり方と見なすことができる
- SDGs（持続可能な開発目標）の目標4は「質の高い教育をみんなに」であるが、幅広い日本語学術論文のOA化は「質の高い知見や知識をみんなに」届けることに通じる
- この意味で、OAは、専門家（研究者）が産み出した質の高い知見や知識を一般市民に公開するとともに、市民と共同で新たな科学的知見を産み出す市民参加型の研究を推進することにも道を開くだろう

II. なぜOAなのか（Whyを掘り下げる）「拙論第1節　問題の背景」のまとめ

この講演のキーワード「永遠の目じるし」について

- 先取権に対する意識が希薄な「牧歌的」研究者が多数存在することは悪いことではない（ある意味で健全）
- 多くの研究者が自発的に喜んでOA化に参加するには魅力的かつ「永続的な理念」が必要
- その理念つまり「永遠の目じるし」の先にある「**永遠の旗じるし**」は何か？
- きょうは、SDGsの目標4を少し発展させた「質の高い知見や知識をみんなに」を提案した

「日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて」には存在しない新たな視点

生成AIも読者

オープンアクセス（オープンサイエンス）に欠かせない大切なもの、それは、2つの「**永遠の目じるし**」と1つの「**永遠の旗じるし**」。これらはOAにおける三種の神器のようなもの。三位一体で機能する

「日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて」には存在しない新たな視点
生成AIの成長に必要な栄養源は言葉 → 生成AIのための**言語資源**開発 → バランス感覚のある生成AI

東山翔平（2024）「大規模言語モデル時代の機械翻訳の展望」Jxiv プレプリント https://doi.org/10.51094/jxiv.932 の一部を以下に引用する

- 大規模言語モデル（Large Language Model; LLM）にもとづく生成AIが有する知識や出力する「意見」は、一部の言語に対応する文化圏のものに偏っていることが確認されている
- これはLLMの学習データの大部分を一部の言語、典型的には英語のテキストが占めているという状況に起因する
- このことは、資源が少ない言語ほど、対応する文化圏に特有の情報について適切な内容のテキストを生成できないことや、文化に依存する事物や概念（Cultural-Specific Items; CSI）を他言語へ適切に翻訳できないことなどに繋がる
- そのため、英語中心のLLMに対し、対象言語や地域ごとの文化差に対する感度を高めたり、多様な文化圏の知識を取り込れたりするための方法が必要となる

「日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて」には存在しない新たな視点

生成AIの成長に必要な栄養源は言葉 → 生成AIのための**言語資源**開発 → バランス感覚のある生成AI

- 日本語で書かれた学術論文がOA化されると、世界中の生成AIがそれを読んで学習する

- 東山（2024）の指摘を踏まえると、**日本語学術論文のOA化は生成AIにおける文化的バイアス軽減の一助になる**と期待できる

手塚治虫作品「鉄腕アトム」、主題歌作詞は谷川俊太郎

- 歌詞一番に「心やさしい　ララララ」
- 歌詞二番に「心ただしい　ララララ」
- 歌詞三番に「心はずむ　ララララ」

➢ 鉄腕アトムの言語生活を豊かに、という表現は不自然でしょうか？

「日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて」には明記していない観点：DOIの重要性

永続的識別子（Persistent Identifier：PID） の必要性

オープンアクセス（オープンサイエンス）に欠かせない大切なもの、それは、2つの「**永遠の目じるし**」と1つの「**永遠の旗じるし**」。これらはOAにおける三種の神器のようなもの。三位一体で機能する

イデア論：市民に伝わる理念を（「FAIR原則」は難解用語）

永遠の旗じるし
SDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」

技術論：作業効率の改善を

社会論：権利意識の断捨離を

永遠の目じるし（その1）
DOI：Digital Object Identifier

永遠の目じるし（その2）
CCライセンス

「日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて」には明記していない観点
DOIなど永続的識別子（Persistent Identifier：PID）の重要性について

- ChatGPT o1 pro に質問してみました「書誌情報があればDOIがなくても検索できるという意見がありますが、本当でしょうか？」
- 回答：書誌情報があれば検索は可能だが、確実さや効率が下がる場合が多い

1.同じようなタイトル・著者の混在

タイトルがよく似た別の論文があったり、同姓同名の著者が複数いる場合、どれが本当に探している論文なのか判断しにくくなることがある

2.書誌情報の誤り・不備

出版年が間違っていたり、論文タイトルに誤字があったりすると、検索結果に出てこなかったり、全く別の文献がヒットしてしまうことがある

3.論文の改訂や複数形態での公開が混在

論文によっては学会発表版・プレプリント版・正式出版版・改訂版など、複数のバージョンが存在することがあり、書誌情報だけでは、探したい“正しいバージョン”にたどり着けない場合もある

4.時間と手間がかかる

書誌情報が不完全だったり、サイトごとに検索方法が異なるため、複数のデータベースを行ったり来たりして探す必要があるなど、時間と労力がかかる

まとめ

全体のまとめ

CC BYで権利意識の断捨離を

1. CCライセンス表示は、一度決めたら変更できない「**永遠の目じるし**」である
2. どの表示を選択するか、きわめて重要な問題であることを研究者に周知すべき
3. 公的資金による研究成果は原則として「CC BY」とするのがよいのではないか

即時OAを推進するには魅力的で分かりやすい理念が必要

1. 先取権に対する意識が希薄な「牧歌的」研究者が多数存在することは悪いことではない（ある意味で健全）
2. 多くの研究者が自発的に喜んでOA化に参加するには魅力的かつ「恒久の理念」が必要
3. その理念つまり「**永遠の旗じるし**」として、SDGsの目標4を少し発展させた「質の高い知見や知識をみんなに」を提案した

今回の要点

今回の要点【再掲】

オープンアクセス（オープンサイエンス）に欠かせない大切なもの、それは、2つの「**永遠の目じるし**」と1つの「**永遠の旗じるし**」。これらはOAにおける三種の神器のようなもの。三位一体で機能する

イデア論：市民に伝わる理念を（「FAIR原則」は難解用語）

永遠の旗じるし
SDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」

技術論：作業効率の改善を

社会論：権利意識の断捨離を

永遠の目じるし（その1）
DOI：Digital Object Identifier

永遠の目じるし（その2）
CCライセンス

この先について

1592～1593年に印刷された天草版『平家物語』
天正遣欧使節が日本に持ち帰ったグーテンベルグ印刷機による
大英図書館所蔵 https://kotobaken.jp/release/news-190318-01/

実務を巡る目前の課題について【再掲】

- 研究者の言語生活はアカデミック・ライティング（論文の読み書き）が中心。 **研究者のアカデミック・ライティング**に必要な要素の一つとして**即時OA実現活動**が2025年度から入ってくる
- 大学研究者の業務負担量はすでに限界に達しているため、即時OA実現活動をサポートする仕組みが必要になるのでは？
- 即時OA推進にかかる業務の全体像や輪郭はいつごろ見えてくるのか？
- 即時OA実現活動をサポートする仕組みのすべてを大学内で開発するのは困難では？
- アカデミック・ライティングと言えば、学生のためのセンターが大学図書館に併設されている場合もある。機関リポジトリも大学図書館が担当している場合が多い。**大学図書館**はこれから新たな役割・使命を期待される。その事実を社会に向けてさらに広く、分かりやすく広報する時機が到来したのでは？
- OA時代の**学協会の将来像**については武田（2011：https://doi.org/10.11517/jjsai.26.6_599）が参考になる

おもな引用・参考文献（https://doi.org/10.51094/jxiv.720 もご覧ください）

Chan, Leslie, Darius Cuplinskas, Michael Eisen, Fred Friend, Yana Genova, Jean-Claude Guédon, Melissa Hagemann, Stevan Harnad, Rick Johnson, Rima Kupryte, Manfredi La Manna, István Rév, Monika Segbert, Sidnei de Souza, Peter Suber, and Jan Velterop (2002) Budapest open access initiative. Open Society Foundations. http://www.soros.org/openaccess/read.shtml

Research Excellence Framework (2024) Research excellence framework 2029 open access consultation. https://www.ref.ac.uk/guidance/ref-2029-open-access-policy-consultation/

Singh Chawla, Dalmeet (2022) Japan launches preprint server—but will scientists use it? Nature, https://www.nature.com/articles/d41586-022-01359-x

UKRI (2023) Monitoring and evaluating the effectiveness of UKRI's open access policy: Principles, opportunities and challenges Prepared on behalf of UK research and innovation. https://www.ukri.org/wp-content/uploads/2023/09/UKRI-04092023-Monitoring-and-evaluating-the-effectiveness-of-UKRIs-open-access-policy-Principles-opportunities-and-challenges.pdf

Wellcome Trust (2022) Grant conditions. https://wellcome.org/sites/default/files/2022-05/grant-conditions-UK-and-overseas.pdf

Wilkinson, Mark D., Michel Dumontier, IJsbrand Jan Aalbersberg, Gabrielle Appleton, Myles Axton, Arie Baak, Niklas Blomberg, Jan-Willem Boiten, Luiz Bonino da Silva Santos, Philip E. Bourne, Jildau Bouwman, Anthony J. Brookes, Tim Clark, Mercè Crosas, Ingrid Dillo, Olivier Dumon, Scott Ed-munds, Chris T. Evelo, Richard Finkers, Alejandra Gonzalez-Beltran, Alasdair J.G. Gray, Paul Groth, Carole Goble, Jeffrey S. Grethe, Jaap Heringa, Peter A.C ’t Hoen, Rob Hooft, Tobias Kuhn, Ruben Kok, Joost Kok, Scott J. Lusher, Maryann E. Martone, Albert Mons, Abel L. Packer, Bengt Persson, Philippe Rocca-Serra, Marco Roos, Rene van Schaik, Susanna-Assunta Sansone, Erik Schultes, Thierry Sengstag, Ted Slater, George Strawn, Morris A. Swertz, Mark Thompson, Johan van der Lei, Erik van Mulligen, Jan Velterop, Andra Waagmeester, Peter Wittenburg, Katherine Wolstencroft, Jun Zhao, and Barend Mons (2016) Comment: The FAIR guiding principles for scientific data management and stewardship. Scientific Data, 3, Article No. 160018. https://doi.org/10.1038/sdata.2016.18

赤池伸一 (2023) 「日本のオープンサイエンス政策について」 https://biosciencedbc.jp/event/symposium/togo2023/files/togo2023-talk001_01.pdf

有田正規 (2021)『学術出版の来た道』東京：岩波書店.

尾城考一(2021)「学術の記録をめぐる動向」『薬学図書館』66(3):103-108. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpla/66/3/66_103/_pdf

賀茂道子 (2024)「日本民主化における言語改革の背景と意義」『国立国語研究所論集』26, 151-169. https://doi.org/10.15084/0002000159

京都大学(2015)「オープンアクセスポリシー」https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/uploads/oapolicy.pdf

国立国会図書館 (2018) 「英国のウェルカム・トラスト，新たなオープンアクセス(OA)ポリシーを発表」カレントアウェアネスポータル記事（2018年11月8日）. https://current.ndl.go.jp/car/37004

小森日菜子・小林 さやか・川田 伸一郎 (2024)「国立科学博物館所蔵ヤマイヌ剥製標本はニホンオオカミCanis lupus hodophilaxか？」『国立科学博物館研究報告A類(動物学)』50 巻 (2024) 1: 33-48. https://doi.org/10.50826/bnmnszool.50.1_33

高田智和ほか（2021）「1948年読み書き能力調査の企画書「Literacy Research Program」について」『日本語学会2021年度秋季大会予稿集』31-36

武田英明 (2011)「学会の過去、現在、未来 ：パリのカフェからFacebook、そして」『人工知能学会誌』26巻6号、599-601. https://doi.org/10.11517/jjsai.26.6_599

内閣府(2023)「統合イノベーション戦略2023」https://www8.cao.go.jp/cstp/tougosenryaku/2023.html

内閣府(2024a)「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」https://www8.cao.go.jp/cstp/oa_240216.pdf

内閣府(2024b)「日本の学術論文等のオープンアクセス政策について」https://www8.cao.go.jp/cstp/oa_houshin_setsumei.pdf (2024年4月24日，25日開催説明会資料)

内閣府 (2024c)「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」の実施にあたっての具体的方策について」https://www8.cao.go.jp/cstp/hosaku_setsumei.pdf（2024年8月27日，28日開催説明会資料）、https://www8.cao.go.jp/cstp/openscience/r6_0221/hosaku.pdf（2024年10月8日改正 関係府省申合せ）

東山翔平（2024）「大規模言語モデル時代の機械翻訳の展望」Jxiv プレプリント https://doi.org/10.51094/jxiv.932

横山詔一・相澤正夫・久野雅樹・高田智和・前田忠彦 (2022)「『日本人の読み書き能力』（1951）における非識字率の再検討 ― テストとしての問題点を中心に ―」『基礎教育保障学研究』6, 11-28. https://doi.org/10.32281/jasbel.6.0_11

横山詔一・前田忠彦,・高田智和・相澤正夫・野山広・福永由佳,・朝日祥之・久野雅樹 (2021)「日本人の読み書き能力1948年調査における非識字率と生年の関係」『計量国語学』33(8): 602–611. https://doi.org/10.24701/mathling.33.8_602

蛇足：文字コードも「永遠の目じるし」の一つであるはずだが…

葛 → 葛

A　　B

- 日本語には「異体字」が多数ある。異体字とは読みも意味も同じであるが、形が違う文字のこと。「会ー會」「桧ー檜」「観ー觀」「潅ー灌」など
- 奈良県葛城市の正式な表記は上記Aの字体、東京都葛飾区はBの字体
- Windows OS の Vista が2007年1月に発売されるまではAの字体がデジタル機器で表示・印刷されることが普通であったが、現在はBが表示・印刷されるのが一般的
- マイクロソフト社はVistaで日本語フォント約150字の字体を変更した。その理由は，JIS漢字規格の一つである「JIS X 0213:2004」に対応するためであった。このJIS X 0213:2004とは，経済産業省がJIS漢字（JIS X0213）の160字あまりについて印刷標準字体（いわゆる康熙字典体）にしたがって規格書の例示字形を2004年2月に変更したものを指す
- その後，図7Bの「葛（L＋人）」が改訂常用漢字表（2010）に追加された
- このほかにも異体字の文字コードが変更された例がいくつかある。日本語コーパスには文字政策の時代差がきわめて複雑な形で織り込まれている。コーパスを用いて漢字頻度の経年変化を調査する際はこの点に注意する必要がある

謝辞

この発表資料の作成において相澤正夫氏（国立国語研究所名誉教授）から貴重なアドバイスをいただいた。石川慎一郎氏（神戸大学教授）と井田浩之氏（城西大学助教）からも多くのヒントをいただいた

また、高田智和氏（国立国語研究所教授）、前田忠彦氏（統計数理研究所准教授）、久野雅樹氏（電気通信大学教授）には日本人の読み書き能力1948年調査の史料研究において多大なご支援を賜った。さらに、東山翔平氏（国立研究開発法人情報通信研究機構研究員）には、大規模言語モデル時代の言語資源開発について貴重なご教示をいただいた

今回の基調講演について、スライド等の準備の大部分は青山学院大学図書館（18号館マクレイ記念館）の研究個室【公式動画「青学TV」https://www.youtube.com/watch?v=sOzi2hLgqUY：04分10秒あたり】で進めた。研究個室の背後には芸術書（画集など）の書架があり、いつも心豊かな時間を過ごせる。図書館員のみなさまには研究個室の手配などでたいへんお世話になった

記して感謝の意を表する次第である

フィンセント・ファン・ゴッホ
《ドービニーの庭》
1890年　油彩・カンヴァス
ひろしま美術館蔵

これより後は付録です

谷川俊太郎

僕は「定義」には興味があるけど、「説明」には興味がないので帯は書けません

・『水道水の味を説明する』鈴木ジェロニモ（2024）ナナロク社の帯に示された言葉

拙論「日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて」の概要

拙論「日本語学術論文の即時オープンアクセス実現に向けて」の概要

- 2025 年度以降に新規に公募する競争的研究費について、研究成果の即時OA義務化の方針が内閣府から示されている。こうした背景のもと、2025年度以降、研究成果の公開方法、さらには、研究のやり方そのものが大きく変わっていくと推察される
- OAの議論においてこれまであまり検討されてこなかった日本語学術論文に対象を絞り、研究者が即時OAを実行しようとした場合に留意すべき点は何か、日本語学術論文の即時OAは研究者・学界・出版界・図書館等の幅広い関係者にどのような影響を及ぼすのか、といった問題点について具体例を提示しながら考えていく

第1節　問題の背景

第2節　関連する論考や資料の紹介

第3節　即時OA化の概要

第4節　基本的な関連用語の整理

第5節　研究者向けのチェックリスト提示

第6節　論文執筆活動の状況予測（フィクション）

第7節　今後の検討課題